論文概要

F.Ch.エーティンガー・人間形成論の研究
～教育的関心の収束過程に注目して～

三輪 貴美枝（滋賀大学教育学部助教授）

１．研究の課題と方法

Bildung概念の歴史的な研究については、すでにドイツ本国において多くの蓄積があり、その研究史自体がひとつの研究対象とさえなっている。そして、その研究蓄積の傾向には、Bildungをすぐれて近代的な教育概念とみなし、W.v.フンボルトのallgemeine Menschenbildungにおいてその典型ないしは理念を見ようとするものがある一方、フンボルト以前の、殊に神秘主義のBildung概念に着目し、Bildungという言葉の初出が確認される13、4世紀のキリスト教神秘主義から17、8世紀の敬虔主義（Pietismus）までの概念展開を辿るものもある。さらには、19世紀中葉に確認される教養市民層（Bildungsbürgertum）への関心からの社会史的な研究も幾つか認められる。本研究における初発の関心は、こうしたフンボルトを境界とする関心対象の分断、さらにはそれに基づく時期区分において選定された対象によって特徴づけられたBildung概念を巡る研究傾向の整理にあったが、それは換言すれば、Bildungの概念展開を連続的で統一的なものとして把握しようとする試みでもあり、そのために本研究において注目したのが、ヴュルテンベルクの敬虔主義の基調を維持しつつ、啓蒙主義を視野に収め、さらには19世紀を展望する射程の長い思想活動を展開していたヴュルテンベルクの敬虔主義の神学者F.Ch.エーティンガー（Oetinger,F.Ch.,1702-1782）の人間形成論である。

本研究ではまず、エーティンガーの生涯とその思想とを整理することが第１の課題となる。テュービンゲンの神学徒として敬虔主義神学を学んだエーティンガーは、当地の教授ビルフィンガーの影響により啓蒙主義の哲学にも関心を向けることになるが、後に折衷主義者と呼ばれることになる彼の神学の素地は、敬虔主義や啓蒙主義に止まらず、異教のものをも含めた多くの思想に出会うことによって形成された。そして、その転機は、領邦教会の牧師として任地に赴任したときに訪れる。本研究では、その思索の転回の契機としてここに注目し、その思索内容の変化を、神学を基礎とした人間形成の原理論からその実際論としての教育論への発展として把握した。エーティンガーそのものに関する研究はドイツ本国でも少なくはない。しかし、その殆どが厳密な意味での神学論ないしは哲学的な内容や概念の吟味に関わるものであって、本研究にとっての直接の先行研究、つまりエーティンガーにおける教育的な関心への転回に関するものは勿論全く見当たらない。ただ、エーティンガーをそのBildung概念史のひとつの断章とした20世紀後半のＧ.ドーメンや、エーティンガーの「カテキズム」に「教育」をみようとした19世紀のK.A.シュミットの著述は、本研究にとっての先行性をそれぞれ半々ずつの側面で僅かに具有してはいる。

２．研究の内容と構成

本研究は大きく４つの課題から成る。第１部における第１の課題（第１部第１章）は、上述の問題関心から、エーティンガーの教育実践論への転回をその活動と思想の展開にお

いて確認することである。ここでは、主として『自伝』の記述を基本としつつも、若干の関連文献を用いてその転機を事実として確認し、そこにおいて明確な教育的関心への転回を把握した。第２の課題（同第２章）は、そのようなエーティンガーが向き合うことになる当時のヴュルテンベルクの精神的文化的な状況、殊にそこにおける民衆教育に関する状況の把握である。これについては、E.シュミットに多くを依拠しつつも、エーティンガーがやがてそのために腐心することになるカテキズム教授に特化した考察を加える。そのカテキズム教授については、ヴァイデマンの担当項目を手がかりとして、ルター以前の前史を踏まえ、ドイツ全体における概観からヴュルテンベルクに焦点化させたカテキズムの展開をも記述する。

第２部における第１の課題（第２部第１章）は、そのような転機を迎えるエーティンガーの人間形成論の原理的な部分の確認である。若きエーティンガーによる最初の大著『再生論』において示された人間形成（Bildung）の論理は、イエスの歩んだ道を追体験をすることに「再生」（Wiedergeburt）の原点を求める敬虔主義の自己形成（sich bilden）の原理そのものであった。それは、やがて「共通感覚」の導入によってより現実的な人間論の立場に立ち、人間形成論としての自己実現的な契機を獲得する。次に、第２の課題（同第２章）は、そのようにして見通されたエーティンガーのカテキズム論の展開について、主要な著作を素材にその変化を辿り、エーティンガーにおけるカテキズム教授論の発展の道筋を明らかにすることである。それは、まず聖職者たちへの詳細な解説と手引きに始まり、やがて年齢段階を明示し、一般民衆、つまり家父や家母たちと子どもたちとの問答の範例を示す、すぐれて実際的なものへと発展する。その最終的な地点にあるのが、家庭教育の基本的なテクストとして後代にまで広くシュヴァーベンの家庭で利用される『敬虔な親と子のための簡易なカテキズムの手本』である。こうしたエーティンガーのカテキズム教授論は、家庭において基本的な生活知識を与えることで宗教的ないしは道徳的な人格を完成させるというペスタロッチやヘルバルトなど19世紀の教育学に繋がるモチーフを内在させている。それゆえ、本研究では、ドイツにおける人間形成論の系譜は、エーティンガーにおいて、いわゆる敬虔主義が啓蒙主義を突き抜けて19世紀を展望する地平に到達していたとの新たな見通しを得ることができる。

このようなエーティンガーの人間形成論研究において得られた知見と展望に基づいて、新たなBildung概念史の可能性を模索した見取り図を最後に提示する。ここにおいては、エーティンガーは明らかに主要な登場人物とはなっていないが、この研究によって、従来のBildung概念史研究における主役たちの通史的な展望に立った再解釈が可能ともなり、殊にヘルダーへの関心は、この見取り図の叙述においては、フンボルトにとって代わる分水嶺的な位置を持つことになるが、やがて古代ギリシアの世界に傾斜することになるヘルダーにおいて本来的に維持されていた敬虔主義への関心は、むしろエーティンガーによって代替され、ロマン主義への経路を導く。なお、フンボルトは、この概念史の見取り図では、Bildungの概念史にとっては帰結点、Bildungの制度化にとっては起点として位置づけられる。

以上の内容構成をおおまかに目次として示すと、以下の通りである。

はじめに
序　論
第１部　F.Ch.エーティンガーの人間形成論の基盤

第１章　エーティンガーの生涯と思想
第２章　敬虔主義と近世ヴュルテンベルクの民衆教育
第２部　F.Ch.エーティンガーの人間形成論の展開
第１章　エーティンガーの人間論
第２章　エーティンガーのカテキズム論
補論１　Bildung概念史試論
補論２　C.v.ロテックの『国家事典』にみるBildung概念
「まとめ」と「展望」
附録

３．成果と展望

本研究で得られた成果は、まず第１にエーティンガーの人間形成論において、その原理論をカテキズム論ないしはカテキズム教授論へと繋げ、その全体像をほぼ完全に把握することができたということである。それは、それぞれを代表する著作を選定し、そしてそれらを読解し、さらにその結果を綴り合わせるという作業において達成された。その第２は、このエーティンガーの人間形成論の研究によって、結果的には、初発の関心でもあったBildung概念史に新たな観点の導入を可能にしたということである。すなわち、この研究によって、従来のドイツ教育思想史研究では必ずしも十分ではなかったBildung概念史の統一的で連続的な把握への道が切り開かれたと言ってもよい。しかしながら、殊に後者については、ようやくその概念史のモデルを見取り図的に示しえたにすぎず、この点の不備はいずれ克服しなくてはならない。